

文学部 人間関係学科
小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は13時00分から15時00分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に6ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

次の【課題文1】と【課題文2】を読んで、設問に答えなさい。

【課題文1】

著作権保護の観点から、公開していません

著作権保護の観点から、公開していません。

(Adapted from David A. Sinclair, Matthew D. LaPlante, *Lifespan*)

⁹ literally 文字通り

¹⁰ compassionate 思いやりのある

¹¹ scholarship (ある学問分野の) 知識、学識

【課題文 2】

生物としての人類は、かつてないほど長生きをするようになった。だが、より良く生きるようになったかといえば、そうとはいえない。むしろ正反対だ。過去 100 年のあいだに私たちの寿命は延びたものの、人生が長くなったわけではない。少なくとも、生きるに値する人生が追加されたとはみなせないだろう。

だから私たちのほとんどは、100 歳まで生きることを考えるとき、今なお「滅相もない」と思わざるを得ない。人生最後の数十年間がどういうものかを目の当たりにしてきたからであり、それがお世辞にも心惹かれるとはいえないケースが大半だからだ。人工呼吸器と種々雑多な薬。股関節骨折とおむつ。化学療法に放射線。手術に次ぐ手術に次ぐ手術。そして医療費。そう、忌々しい医療費だ。

私たちは時間をかけて苦しみながら死んでいく。豊かな国に住んでいる人は、次々と病気に見舞われながら人生最後の十数年を過ごすことが多い。私たちはそれが普通だと思っている。さして裕福とはいえない国でも寿命は長くなり続けているため、いずれは新たに数十億の人々が同じ運命をたどることになるだろう。医師で作家のアトール・ガワンドは次のように指摘している。私たちは寿命を延ばすことに成功したものの、そのせいで「晩年イコール医療を受けること」という図式を生んだ、と。

だが、そうでなくてもいいのだとしたら？ 若くいられる時期をもっと長くできるとしたらどうだろうか。しかも、あと数年、などではない。あと数十年長くだ。最後の年月も、その前の年月とそうひどくは変わらずにいられるとしたら？ そして、自分たち自身を救うことで世界を救うこともできるとしたら？

もう一度 6 歳になるのは無理だとしても、26 歳や 36 歳にならどうだろう。

何歳になっても子どもと同じように遊び、大人としての約束事へとすぐに移っていかなくてもいいのだとしたら？ 十代のあいだに私たちは様々なことを詰め込もうとするが、そこまでする必要がないとしたら？ 二十代に強いストレスを感じることなく、三十代や四十代になっても中年の気分を嘔み締めずに済むとしたら？ 五十代であつても違う自分に生まれ変わりたいと願い、そうしてはいけない理由を 1 つも思いつかずにいられるとしたら？ 六十代になっても、自分が何を残したのかと悩むことなく、生きた証しを新たにつくり始めることができるとしたら？

時間が刻々と過ぎていくことを気に病まなくていいのだとしたら？ しかもそうい

う未来が、実際にすぐそこまで迫っているとしたらどうだろうか？

そんな未来は想像もつかない？ だとしても無理はない。医療のあり方や、人間の生命のあり方については、長い年月を通して培われた固定観念がある。だから、「そんなことは起きるはずがない」といって片づけるほうが、大勢の人にとっては楽なのだ。

だが、私たちは自分で思っている以上に、物の見方を変えるのが得意だ。人生から何を期待するかや、年齢とはそもそもどういう意味なのかについてもそうである。

たとえばトム・クルーズのことを考えてみてほしい。あの『トップガン』俳優は、五十代後半に入った今も第一線で活躍している。筋肉は盛り上がり、顔にはほとんどしわがなく、まっすぐな生え際から黒い髪がふさふさと生えている。ただ演技をするだけではない。長らく若い役者の領分とみなされてきたような役にも扮してみせるし、危険なスタントもたいていは自分でこなす。猛スピードのバイクで路地を駆け抜けたかと思えば、離陸する飛行機にしがみつき、世界一高いビルの屋上からぶら下がりもすれば、大気圏の上層部からスカイダイビングもする。

私たちにしあって、最近では「今の50歳は30歳と同じ」という言葉をよく口にすることでないか。50を過ぎた人生はどうあるべきかというかつての見方を、私たちは忘れていたのだ。それも、何百年も前の話ではなく、ほんの数十年前のことだというのに。

一昔前の50過ぎは、飛行機から飛び降りるトム・クルーズのようではなかった。その姿はまさにウィルフォード・ブリムリーだった。ブリムリーは1993年の映画『ザ・ファーム 法律事務所』でクルーズと共演した俳優である。当時、クルーズが30歳だったのに対し、ブリムリーは58歳。すでに白髪の生えた老人であり、セイウチのようなひげを生やしていた。

その数年前、ブリムリーは『コクーン』という作品に出演した。高齢者グループがエイリアンの「若返りの泉」を見つけ、そこから若々しいエネルギーを（若々しい外見を、ではなかったが）もらうという物語である。年寄りが十代の若者のように走り回る姿は、大いに観客の笑いを誘ったものだ。

あれほどの高齢者がそんな若々しいふるまいをするのは、恥ずかしいと当時は考えられていた。しかし、映画が公開されたとき、ブリムリーは今のトム・クルーズより7歳くらい若かったのである。『ニューヨーカー』誌のイアン・クラウチの言葉を借り

るなら、のクルーズはやすやすと「ブリムリーの壁」を打ち破ったのだ。

壁は倒されるものである。だからこれからもまた倒れるだろう。あと 30 年もすれば、六十代や七十代の映画俳優が猛スピードでバイクにまたがり、高いところから飛び降りたり、高々とカンフーキックをお見舞いしたりする姿が珍しくなくなるに違いない。なぜなら、その時代の 60 歳は 40 歳と同じだからだ。じきに、未来の 70 歳は 40 歳と同じになり、そうやってどんどん続いていく。

そんな時代はいつ来るのか？ じつはすでに始まっている。あなたは、その革命の恩恵を受けられる可能性が高い。あなたは外見も行動も若くなるだけでなく、実際に若返る。肉体の面でも精神の面でも。けっして突拍子もないたわ言などではない。あなたは今の平均よりも長く生きるようになり、しかも新たに加わる年月はより良いものとなる。

のそうしたプラスアルファの年月が実際にもたらされたとき、大事なのは私たちがそれをどう使いたいかである。

(デビッド・A・シンクレア、マシュー・D・ラプラント [梶山あゆみ訳] 『老いなき世界』東洋経済新報社 による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

- 問1 【課題文 1】で取り上げられている心理学実験で、どのような結果が示されたか、またその結果から筆者はどのような結論を導き出したかについて述べなさい。(60点)
- 問2 【課題文 2】の下線部 (ア) が示す内容はどのようなものか、説明しなさい。
(20点)
- 問3 【課題文 2】の下線部 (イ) に関して、私たちはどのように生きることが望ましいか、その理由も含めて、あなたの意見を 800 字以内で述べなさい。(120点)